

記念公演

医療の“見える化”から見た、精神科医療とがん医療 ～ “チーム医療による見える化” で変わってきたがん医療～

講師：小嶋修一（TBS テレビ報道局 解説委員/がんサバイバー）

座長：高橋清久（公益財団法人精神・神経科学振興財団）

大嶋巖（日本社会事業大学/認定 NPO 法人地域精神保健福祉機構・コンボ）

今回の特別講演のテーマは「医療の“見える化”から見た、精神科医療とがん医療～ “チーム医療による見える化” で変わってきたがん医療」でした。講師はTBSテレビ報道局解説委員（医学・医療・科学担当）の小嶋修一氏で、小嶋氏自身精巣がんを2回体験したがんサバイバーです。ご自身の体験を踏まえた講演内容の興味深さに加え、明快な話しぶりと、見事なスライドで聴衆は小嶋氏の講演に引き込まれました。

講演内容は小嶋氏がアメリカで体験したがん治療の話が主なものでしたが、患者さんが治療チームの一員であり、患者さんが今後の治療について十分に理解し、納得した上で、複数の治療法の中から患者さん自身が治療法を選択して治療が行われている現状のすばらしさを強調されていました。そのような話の中で、診断から治療開始、そして治療終了後まで、一貫して患者が治療の中心に置かれること、医療行為のすべてを患者がリアルタイムに知り、治療に参画できること、患者が持つ不安に対しては治療が始まる前からサポートが提供されるといったことが印象的でした。

このような患者中心のがんのチーム治療は精神医療にも共通するものが多々あるように思えます。患者中心ということは精神科医療でも最近では声高に言われるようになりまし、当事者が主治医と話し合いながら治療方針や薬の選択を決めていくというSDM(Shared Decision Making:共同意思決定)という言葉も使われ始め、今回のフォーラムでもシンポジウムでとりあげられています。

小嶋氏の紹介したアメリカのチームアプローチでは、がんサバイバーの力が重要な役割を持つことが強調されていました。実際のがんを体験した者が患者の不安を共有して支援するというものですが、これはまさに精神医療・福祉で今後ますます重要になると思われるピアサポートに他なりません。

まだまだ、我が国の精神医療はアメリカのがん医療でのチームアプローチにははるかに及びませんが、将来的には同じレベルに達することができるように思えます。その素地が着実に固められつつあると考えるのは楽観的過ぎるでしょうか？ そうでないことを願っています。

質疑応答の時間には講師の希望もあり、1ヶ月前に起きた相模原市やまゆり園の重度障害者の殺人事件についての議論もありました。医療の見える化とはやや離れた話題のようでもありましたが、精神障害に対する社会の認識という点からは共通した問題です。精神科医療でもっとも「表に出にくい」テーマを「見える化」する意義を確認できたように思います。

時間の制約から議論は十分には深まりませんでしたが、いくつかの重要な問題提起がありました。その一つが優性保護的な考え方についてですが、かつて優性保護が当然のように語られ法律にもなった時代がありました。そのような時代への逆戻りが心配という意見でした。優性思想が否定され障害者の人格・人権尊重が定着してきた過程を振り返れば、それが杞憂になるよう、改めて社会的な確認が必要になるでしょう。

今回の事件で被害者の氏名が明かされないことの問題も議論になりました。被害者の名前を公表しないことは

一般の人とは異なる扱いであり、そこに差別・偏見を感じるという意見です。

小嶋氏はその考えを認めながらも、家族の意向を重んじマスコミは名前を公表しなかったと答えていました。すなわち、公表することにより家族が特別視されることの問題です。それは家族に障害者がいたという事実の公表、マスコミから家族が取材を求められ、それが過剰になる恐れ等の問題が予想されるというものです。

障害者に対する社会的な差別がなければそのような不安はないものと思われそうですが、残念ながら現実の社会は十分に成熟したのではなく、差別・偏見が厳然として居座っています。そのような状況下では名前の公表を差し控えるのは致し方がないのかもしれない。

聴衆の関心が高い話題を集めた今回の特別講演は時間の経つのを忘れさせ、時間不足を嘆かせるものでした。

《高橋清久（公益財団法人精神・神経科学振興財団）》

